

## 論文の和文要旨

論文題目	マレーシア語の文型に関する研究
氏名	鷓沢洋志

以下に、本稿「マレーシア語の文型に関する研究」の要旨を述べる。章ごとの順序に沿って、要約を行っていく。

本研究は、現実の言語運用において有用となるような、マレーシア語の文型を構築することを目的としている。文型とは、多くの新たな「文」を生成することのできる、モデルとしての「型」であり、同時に、任意の「文」の構造把握においても有用であることが期待される。

まず、本研究における文法観として、従来の「形式」面重視の文法観に対する、本稿独自の視点を主張する。それは、言語の体系としての「文法」を考える、多角的な視点であり、言語体系を成すその規則として以下の三つのルールを認めるものである。言語形式の配列に関する「文法」、言語形式の関係性を支える情報的な「意味内容」、及び現実の発話にかかる「語用制約」、これら三つのいずれもが相互に影響を与え合うことで言語の体系が構築されていると考える。

「文」に関しては、マレーシア語では形式的な面からの規定を行うことが望めないことから、その機能を基に、作業仮説としての「文」モデルを立てる。本研究では、言語をコミュニケーションの道具としてとらえ、言語形式がその意思・情報の伝達を担う記号として、十分な言表

力があるものとする。そして、実際の発話として最低限必要な情報量という視点から、「文」が、「何について」「どうである」という情報内容を表すものと規定する。それを表現する言語形式が、それぞれ「主語(S)」「述語(P)」であり、それを基に文モデルを組み立てていく。

基本的な研究方針として、本研究では、既存の特定言語理論に依拠するのではなく、先人の積み上げてきた知見を活かした上で、新たに多くの記述を加え、文型構築を行っていく。そこでは、「基礎言語理論」と呼ぶような手法、つまり、従来の記述研究において用いられてきた概念を利用し、マレーシア語の実現象を十分に記述していくことから考察を始める。

研究の対象とするのは、音形を持つ言語形式であり、言語記号の性質である線条性に基づいて、記述・分析を行う。ソシュールの言うように、配列された記号の関係、即ち「連辞関係」は、線条的に配列されることで差異を生み、関係性を持つと考え、従来の「階層的」な統語関係に関して、本稿では、階層性を統語関係の前提とは考えないと主張する。また、抽象的次元における統語操作に関しても、記述を基に行う研究であるため、分析の手法としては採用しない。省略と呼ばれる考察法に対しても、理論偏重の考察に端を発するものである以上、本研究としては妥当な方法ではないと考える。

マレーシア語の文型に関する先行研究として、Asmah Haji Omar(1968)と Nik Safiah Karim(1995)を批判的に検討する。従来の研究に対しては、マレーシア語独自の文法に基づき考察するという姿勢が徹底されず、西欧の文法観とその手法に依存しすぎていたという批判が挙げられる。ある言語において考えられる現象なり、その文法的な概念なりが、別の言語においても同様に存在し、考えられるという保証はないことは言うまでもないことである。

それ以上に大きな問題点として、いずれの研究に対しても、以下の二つの点が挙げられる。一つには、記述の不足であり、もう一つは、序列に関する問題である。「文型」研究のような基礎的な言語研究においては、仮説としての「理論」を裏付けるための十分な記述が必要不可欠であるが、理論を先行させるあまり、その記述が不足してしまっているという批判ができる。加えて、そのような理論先行の研究において、構成素の構造だけでなく、その序列に関しても、先験的に決定することにより、不具合が生ずることが考えられる。とりわけ、マレーシア語に対する経験的な観測によれば、序列は情報構造とも関係があり、形式面のみを追究した理論から絶対的に決めることは不適切であると言える。

問題点の解決策として、本研究では、仮説モデルを立て、それに対する十分な記述を行い、内部構造記述だけでなく、序列に関しても、その現れうるパターンとその要因を考察していくことで、より言語現象を妥当に説明しうる「文型」を構築することを試みる。

本論として、「文」モデルを形成する構成素を考えていく。先に述べた「主語」「述語」を一次主要素とし、文の中心的な必須構成素と考える。一方、その主語と述語の外部に存在する、別の文法的単位として、「文補語(SC)」という構成素を認める。また、主に述語などにおいて見られるような、状態詞や動詞を意味・統語的に補完する文法的単位を「状態詞補語(AC)」「動詞補語(VC)」とする。これらの三つの構成素は、文形成という点から、二次主要素と規定する。その他にも、付属要素となる「修飾語」もあるが、それは不定数の付属的な機能ということを考慮し、従来の研究同様に、文型モデルの一部として記述することはしない。

一次主要素の「主語」は、品詞レベルから見ると、名詞・動詞・接置詞(句など)によって形成することができる。「述語」は、名詞・状態詞・動詞・接置詞(句など)が可能である。一方、二次主要素であり、主語・述語の外部要素にあたる「文補語」に関しては、名詞・動詞・接置詞(句など)が可能であるが、主に名詞によって形成されることが多いと考えられる。また、主語・述語などの内部要素にあたる「状態詞補語」「動詞補語」は、前者が名詞・動詞・接置詞(句など)が形成可能であるのに対し、後者は、それに状態詞を加えた、四種の品詞が形成可能であると言える。このような品詞レベルによる内部構造記述は、文型を構築するこれらの構成素に関する知見を増やすことに役立つと考えられる。

作業仮説となる文モデルを構築する構成素は、上に挙げた五つの文法的単位である。これらの組み合わせと序列に関しては、初めに一次主要素である主語と述語のみで考えた場合、次にそれに文補語を加えた場合と、二通りから考えていく。

主語・述語の場合、序列は主語－述語、述語－主語の二種類しかなく、それらのいずれもが文として現れうると考えられる。一方、主語・述語・文補語の場合、序列は、文補語が先行する二種類と、文補語が後置する二種類の計四種類が確認できる。よって、これらの構成素を用いた文型としては、六種類のパターンがあると考えられる。尚、状態詞補語と動詞補語に関しては、内部構成素であるという点から、外枠の「型」を示す文型の組み合わせとしては含めないことで、文型としての抽象化レベルの統一になると考えられる。もちろん、これらは内部要素として、それぞれの現れうる場合と型との関係性を考察する必要があり、上の六種類のいずれにおいても等しく可能であるかという点は、記述・分析を要する。

序列の要因を考えることで、これらの文型相互の関係が見えてくる面もある。マレーシア語では、「何について」かを先行させることが望ましいという仮説理論が立てられ、主語と述語による文の場合、主語が先行する「型」が構造上の制約がないという点が指摘でき、それもこの理論を支える論拠となると考えられる。だが、全てがこのような「基本」を想定しうるわけで

はなく、存在に関する表現などでは、「何について」が修飾語として先行する場合、主語の位置が述語に後続するなどのカタチが見られる。また、文補語の位置に関しても、同じ要因による位置決定が考えられるが、一方、言語形式の「長さ」などの別の要因の影響も否定できないと言える。

このようにして構築された文型モデルの拡張として、語用制約などの諸要因による構成素の不在ということを考えていく。そこでは、「経済性の原理」や「協調の原理」などの運用に関するルールがあり、言語形式としての表出やその構造と競合関係にあると言える。また、単文から「重文」「複文」への拡張という面もあり、そのような構造に対しても、本研究における単文モデルの文型が有用であるということを、記述・分析を通して例証していく。加えて、実際の運用という点からも、「埋め込み文」などの複文構造が有限なものであるという主張をし、その構造による規制を、有限となる要因の可能性として提示する。

結論として、マレーシア語の文型を以下のように示す。

1. S+P
2. P+S
3. SC+S+P
4. SC+P+S
5. S+P+SC
6. P+S+SC

これらの文型は、それぞれ相互に関係する部分も認められる。1の文型は、2に比べて、構造上の規制もないという面において基本的であると言えそうである。但し、全てがそのような「基本」を持つというわけではなく、情報構造による構造決定というものも考えられる。3や4は、「何について」かを先行させているという点で、5や6よりは基本的であるとも言え、後者は補足・追加的な面もあることから、一部規制があるとも考えられ、先の主題先行の理論を支えている。また、3と4では、「何について」かを先行させるという観点からは3が望ましいにも関わらず、4の構造の頻度が決して少なくないという面があるが、そこには、「型」の影響が要因として考えられるのではないかと述べた。

このようにして構築された「文型」は、従来のもよりも、より多くの文例の構造を妥当に説明しうるものであり、その「型」を利用することで、様々な文を派生することを可能とするものであると主張する。残された課題として、動詞補語の下位分類に関する分析や、文補語を伴う文における、意味・統語的な関係に関する問題などがあるが、それらを継続的に考察していくことで、「文型」に対する知見も増し、さらに有益なマレーシア語の文型を構築することにつながる。